

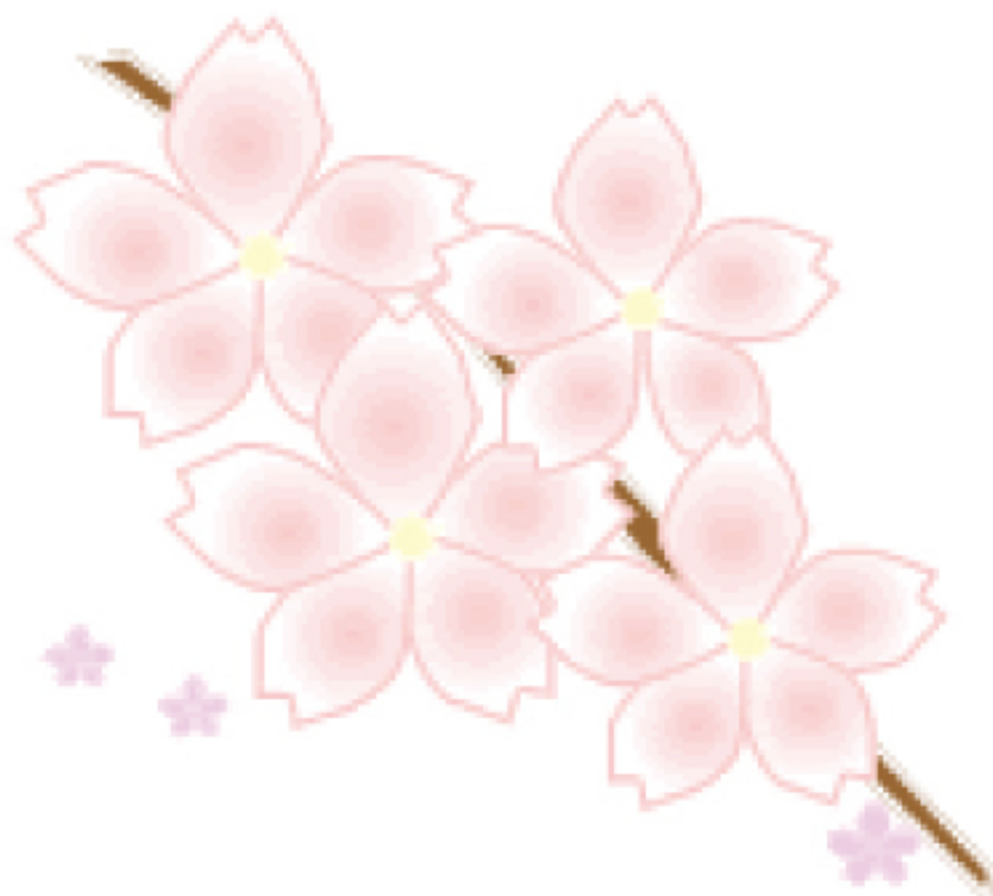
きぼうのいえ ニュースレター



2012年 春号

特定非営利活動法人 きぼうのいえ
〒111-0022 東京都台東区清川2丁目29番12号

電話：03-3875-7523 Fax：03-3875-7525
E-Mail：kibounoie777@mbm.nifty.com
ホームページ：http://www.kibounoie.info



「ご大切」ということ

施設長 山本雅基

フランシスコ・ザビエルが日本に初めてキリスト教を伝えた当時は、「愛」という言葉はなく「ご大切」という言葉が使われていたそうです。本田哲郎師(大阪の寄せ場を中心に活動されている神父、聖書学者)によると、当時の聖書の訳には「(イエスが)自分の仲間たちをこの上なく大切に思い、徹底して大切にあつかった」とあるそうです。日本人にとって「愛」という言葉は照れくさく、いくつかの異なる関係性、(異性愛、人類愛…etc)を含んでおり、一般では用い方に注意が必要なのかもしれません。

ところで私は、きぼうのいえは徹頭徹尾、皆さまからお金ではなく「ご大切」をいただくことで運営させていただいていると思っています。確かにお送りいただくものはお金の体裁をとっていますが、その本質は「愛」です。行き場を失い、身寄りもなく、余命に限りのある方々に、可能な限り人間として「愛」に満ちた日々を送って欲しい。そんな「愛」、「ご大切」のこころ、人間の持つ崇高で気高い心情こそが、きぼうのいえの稼動燃料なのだと思います。

いまだから皆さまに告白するのですが、先の東日本大震災の直後から、きぼうのいえへの会費・寄付金が激減し、存続の危機が続いていました。その余波は正直申しまして現在も続いております。一部では、「うちに来るはずの寄付金が東北にいったしまった」と考えるNPO関係者がいるらしいとも聞いたことがあります。私も恥ずかしながらそんな思いに誘惑されそうになったことがありました。

しかし、資源の量には限界があつて、限られたパイを皆で奪い合うという考えの本質は経済的で「この世」の眼でみたものです。しかし、本物の眼「ご大切の心」はそうであつてはならないと思います。日頃からきぼうのいえをお支えくださっている皆さまの「ご大切」のこころが義援金のかたちとなって、より緊急性が高く危機的な状況にある東北地方の被災者の方々のもとへ向けられたことを、私は、それこそ素晴らしい愛の業であると敬服します。またそうでなければならぬと思っています。(2面につづく)



きぼうのいえでは私どもの活動にご賛同頂ける皆様方にご支援・ご寄付をお願いしています。

振り込み方法は ①郵便振替、②銀行振込み、③インターネット募金 の3つがあります。

ご協力頂けますよう、お願い申し上げます。

① 郵便振替の場合	② 銀行振込の場合 ^(※1)	③ インターネット募金
郵便振替番号: 00190-6-388670	みずほ銀行 三ノ輪支店 普通 口座番号:1284037	ホームページからアクセスして、 カード決済することもできます。
名義:きぼうのいえ後援会	名義:特定非営利活動法人きぼうのいえ	http://www.kibounoie.info/index.html

※ 1 銀行振込の方で領収書が必要な方はメール等で連絡先をお知らせ下さい。

正会員希望の方は、お手数ですが事務局までご一報下さい。

(1面からつづく) 私たちが手放さなければならない、究極の、そして最後のとも言える誤解は、「愛」には限りがあると考えてしまうことだと思います。だから「愛」の名を借りた金銭の争奪戦がはじまるのです。しかし本当は、愛はすべてを超えて無限に存在します。この宇宙の果てまですべてを超えて満ち満ちています。その考えに得心したとき、私たちは金銭の争奪者から、愛(ご大切)の探求者、愛(ご大切)の提供者へと変貌できるのでしょうか。私は皆さんの思いを信頼し、無限に広がる愛の存在を信じます。そうした視座の中でこそ、きぼうのいえは存続していくのだと信じてやみません。

◆ぱっとライス大会やりました …「子どもじゃあるまいし」(ガーン!)

お米を機械に入れ、**ボン!**って大きな音が出てできる菓子を、ばくだんとかボン菓子といいますが、スタッフNさんの郷里では、これを“ぱっとライス”と呼ぶのだそうで、しかも、本人はその名前が全国区だと思っている…そんな雑談から、「そうだ、今年のクリスマスは趣向をかえて、ぱっとライス大会にしよう!」という話になりました。ネットで検索したら近所に業者を発見、お菓子をきっかけに入居者さんも昔話に花が咲くだろうと楽しいイメージはどんどん膨らんで…そして当日、準備万端整えてみなさんを誘いに行ったら、「子どもじゃあるまいし、菓子だけ持ってくればいいよ!」(ガーン!)…それでも、いざ始まると、**ボン!**という音と濛々と煙る水蒸気に大はしゃぎ、体調の優れないEさんにも久々の笑顔があらわれました。ちょっと当初の予定とは違ったけど、今度のクリスマスはどんな手で行こうか?…早くもつぎの作戦の開始です。(し)



年 末

◆正月は仮装大会…



元旦出勤のメンバーはこの3人一。みなで語らって仮装大会です。1人目はポンチョ姿、「化粧して可愛くなっただけでは?」との意見も。2人目は、「昔風の女学生」のつもりだったのですが、入居者さんからは「AKBみたいだな」—彼らのほうがナウかったようです。3人目はヒゲ眼鏡に寿のマント、これは爆笑でした。年甲斐もなく、本人が一番喜んでいたのでしょう。入居者さんたちにも海賊帽をかぶせまくり、玄関前でパチリ。今年はおくして始まりました。(あ、メンバーは撮影したひとをいれて4人でした) (TS)

年 始

ESSAY

スタッフW

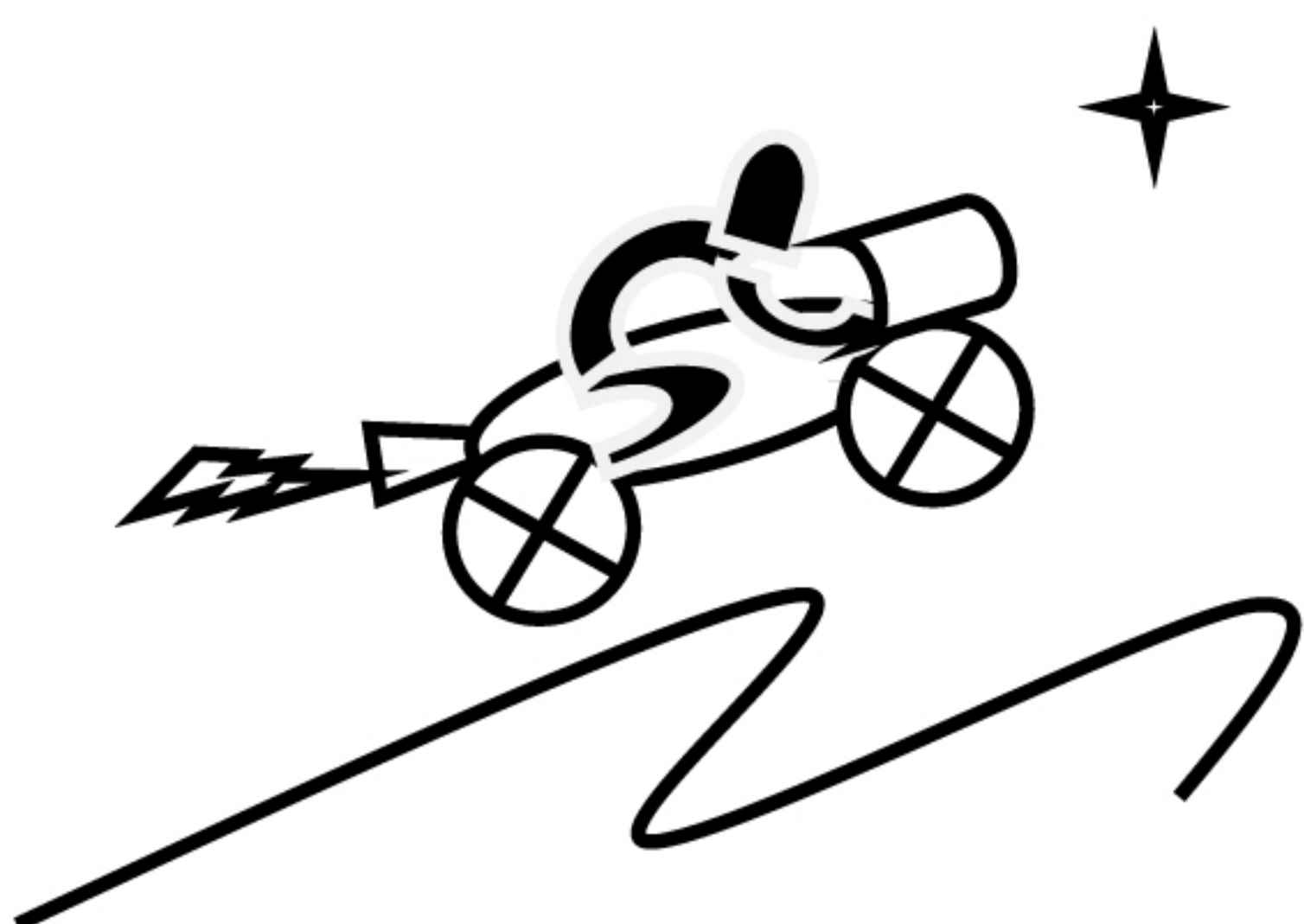
あった。そして、誰かの役に立ちたいと、願っていた。ある時は、訪問看護に訪れた看護師さんの悩みの相談に乗ってあげる事ができた、と、とても嬉しそうに話されていた。

同じキリスト者として、何度か、Aさんのお部屋で一緒に祈りを捧げた。Aさんは、その度に周りの方々のために、祈りを捧げていた。

その時点でも十分若かったAさんは、もっと若いころはオートバイに乗って、飛び回っていたという。おとなしそうな方だったので、意外な感じがしたが、人には色々な面があり、時もあるのだろう。

その後、Aさんは、あつという間に天国へ旅立っていった。

オートバイに乗って風をきって走るのが好きだったAさんは、フルスロットルで天国まで駆け抜けていったのだろうか。僕は、神さまがAさんの苦しみの時を短くしてくださったのだと、信じている。



FIGURE



きぼうのいえにきて半年のスタッフTさんは、宿直の夜に粘土細工をしているそうです。以前勤めていた施設で自然と技が身についたといいます。あまりに上手なので、わたしの描いた入居者・Mさんのイラストを手渡し、それをもとに制作されたのが右の写真です。正直そっくりすぎて写真の掲載が憚られます…。作ってみての感想を尋ねたら、「絵になる顔だから作りやすかった」とのこと。今度ご家族がお見舞いにくるといっているので「それならお孫さんにあげたら？」と勧めておきました。その後、べつの入居者・Iさんの製作にチャレンジしていると聞いていたのですが、ある日、玄関に飾られた花咲か爺のジオラマをふとみると、そこにはなんとIさんが—（左の写真）。

きて、つぎに人形になるのは誰だろう？（TS）

気持ちと技術とサービスと…

介護タクシー・Iさんに聞く

もともとタクシー会社に勤めていたのですが、先輩に誘われて今の介護タクシー会社に来ました。一般のタクシーではスピードを求められますが、介護タクシーは乗り心地が優先です。そのため、事前に利用者さまの身体の状態を確認したりもします。仕事は単調ですが、ぽっかり空いた待ち時間をどう使うかも楽しみのひとつですね。

印象的だった利用者さんといえばSさんでしょうか。深く関わられた気がします。Sさんは乗車中にいろいろ身の上話をしてくれ、また、ぼくを気に入ってくれたらしくて、仕事以外の時間に個人用の携帯に電話をくれたこともありました。入院時、お見舞いに行けなかったせいで拒絶され、ショックだった時期もありますが、少しずつ修復していき、Sさんが亡くなったのはちょうどそんな矢先でした。

—IGさんの車椅子への移譲はたいへんでしょう？

あれだけ体が大きく、重く、硬直しているのに、登録ヘルパーさんたちの勉強会でも必ず難しい例として名前が挙がります。移乗の際、スタッフの方に手伝ってもらったこともありましたが、でも、ゆっくりやれば端坐位もしっかりできるし、足も踏ん張るだけの力があるので、一人で十分できるんですよ。介護技術がなければできませんが、IGさんができるなら誰でもできるという自信がつかますね。

—以前、入居者さんをコンサート会場まで連れて行って頂きました。

通院以外でのタクシーの活用方法は、会社のほうから提案はできますが、その気になってもらえないと利用に繋がりません。その点では、入居者さんの気持ちをのせていく、身近にいるスタッフの方々の役割は大きいですよ。もちろん、乗車中の会話で利用者さんがぼろっ

とこぼした言葉を聞き洩らさないようにして、それをサービスに生かそうと心掛けています。

ホスピスだからという意識はとくにありません。ただ、病気が急変して病院に緊急搬送してそこで亡くなることがありますよね。そういうとき、ご本人やスタッフはどう思うのかなってふと思ったりします。

（談）

「感謝します」

きぼうのいえに入居された末期の癌であったAさんの部屋をおとすれた。挨拶をして、部屋を出ようとしたときAさんが微笑みながら「感謝します」と言ったので、思わず「あれ？もしかしてクリスチャンですか？」と尋ねると、Aさんは「はい、そうです」と笑顔で答えた。僕もそうなのだが、プロテスタントのクリスト者には独特の言い回しや教会用語を使うことがあって、それとわかる時があるのだ。この「感謝します」という言い方もそのひとつかもしれない。

Aさんの病は重く、肉体的にはもちろんだが、精神的にも、若い人かたであっただけに、どれほどの苦しみ、悲しみ、痛み、があつたことであろうか。しかし、そのような状況にあつてもAさんは、いつもスタッフに気を遣う親切なかたで

長野県伊那一年一回の納骨式

スタッフ 下条知加子

十一月十日木曜日、朝九時からのミーティングを終えると、一路きぼうのいえのお墓を目指して出発しました。昨年以降亡くなった方たち七名の御遺骨を車に乗せ、メンバーは山本施設長、チャプレンと職員数名―。

きぼうのいえのお墓は三年半ほど前に長野県・伊那に建てられました。それ以来、毎年十一月に、埋葬と逝去者記念の礼拝を行なっています。その一年間に亡くなられた方でご家族などに引き取られなかった御遺骨をお納めし、また、それまでにきぼうのいえで亡くなった方たちの御国での平安を憶えてお祈りするのです。

この日は、予定していた午後二時を少し回ってお墓に着きました。雨が降りそうな予報で心配でしたが、なんとか降らずに保ってくれて安心。チャプレンの司式で祈りと賛美が献げられ、共に聖書の言葉とメッセージを聞きました。遺骨は一体

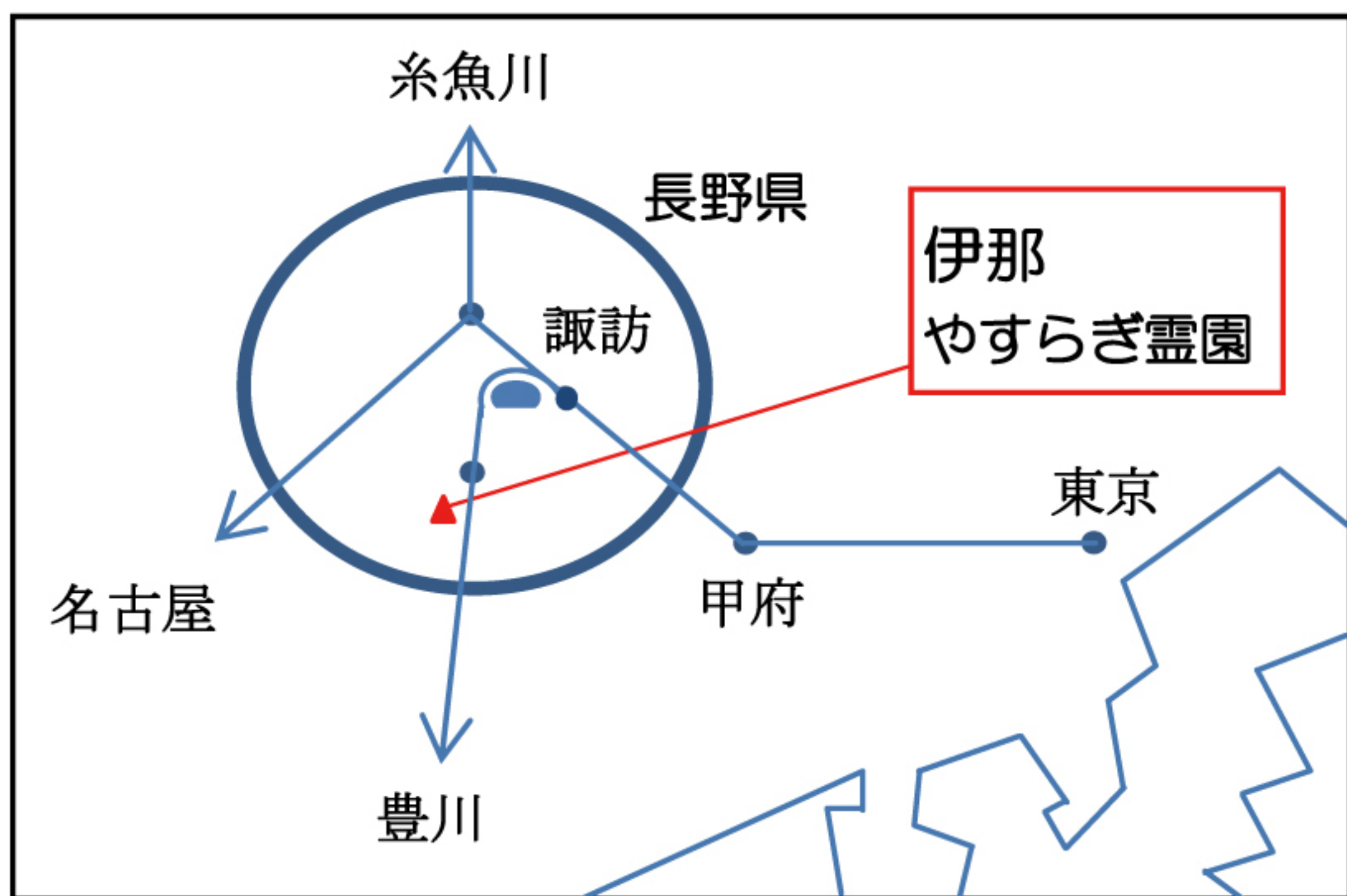
亡くなった方たちの平安を憶えて



ずつ参列者から石屋さんを手渡され、墓石の下に一つひとつ丁寧に納められました。そして最後に、一人ずつお線香を供えて墓前で黙祷をささげました。

お墓のすぐ後ろには線路があります。時折り電車が通るのですが、この時もチャプレンのメッセージがちょうど終わったところで一本の列車が通り過ぎて行きました。

静かな田舎の風景の中に響き渡るガタンゴトンという音は、まるで埋葬された人たちの応答のように聞こえました。山谷のような都会の真ん中からこんな山の中に連れて来られて、彼らは今どんな思



いでいるのだろうか。そんなことを思わされる一瞬でした。静かすぎてさびしくないだろうか。ずっと山谷で過ごしたいと願っていたのだろうか。それとも、それぞれの故郷に帰りたいと願っていたのだろうか。

ともあれ、このお墓にはきぼうのいえの人たちが何十人も入っています。「やあ、久しぶり。元気でやっていますか?」そんな会話が聞こえてくるようです。今日私たちと一緒に遙々伊那まで旅して来た人たちも、先に来ていて一年ぶりに会った人たちも、今は天国で賑やかに、

楽しく過ごしていることでしょう。

編 集 後 記

スプリンクラー、設置しました。

きぼうのいえのような宿泊所にも、スプリンクラーの設置が義務付けられるようになりました。以前より消防署から指導を受けており、数社から見積りをとったうえで、精査のうえ業者を選定し、東京都への補助金申請などの事務手続きを行いました。1月下旬より工事を開始し、2月末までに終了しました。移動に介助が必要な入居者の方も多施設です。災害時の危機管理は、先の震災の時に認識を新たにしておりましたが、スプリンクラー設置によって、大切な命を守る一助となることに安堵感を覚えています。(え)

去年の秋号でインタビューしたKさんが亡くなって数日後、入居者のIさんが「野球の話ができなくなって寂しいよ」とむこうから話しかけてきたのが印象的でした。そういう同胞感情を、私はいいなと感じます。ところで今号でも入居者さんに話を聞こうと何人かに声をかけたのですが、みな断られました。話し辛いことが多いのかもしれませんが、しかし逆に湧き上がってきたのは、多くを語ってくれたKさんへの感謝でした。じつはあの語りには、ひとつだけ「ウソ」があったとあとでわかりました。それは切ない「ウソ」で、むしろ願いに似たものでした。そうした話を聞いたことを、私はむしろ喜ぶ気持ちでいます。(S)